

長岡開府400年

vol.4

ROOTS

400



<特集>

信濃川記行

ながれはつねに

われとあり



馬高遺跡出土 火焰土器(部分)

発刊趣旨
英語の ROOTS (ルーツ) は、樹木の根や物事の始まりを意味します。
また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、
開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。



長岡藩絵師 飯島文常画「雪之図」(部分)

長岡城下を貫流する内川(現柿川)の柳原橋付近の図。内川は信濃川(大川と呼んだ)の一支流。柳原町付近で赤川と合流し、人びとの生活に大きな影響を与えた川だ。二丈ばかりもある雪の壁を背景に、市(いち)が建ち、花を売買している景は、正月前に豪雪に遭ったのだからか、もの干し場に染物が干してある。雪捨ての騒で、子守りの少女たちが下駄(足駄)で雪にとらわれて転ぶ姿はユーモラスだが、実は厳しい冬を楽しくすこそうという気持ちがあらわれている。



火焔土器

その装飾的な造形で観る者を魅了する馬高遺跡の火焔土器。約5,000年前、信濃川流域で誕生し、華開いた縄文文化の極致である。鶏頭冠と呼ばれる4つの大きな突起が燃え上がる炎を連想させることからその名がつけられた。動物の意匠として解釈する説や、胴体の渦巻文様に信濃川の水流をイメージする説などもある。長岡の縄文人たちはいったい何を想ってつくったのであろうか。(高さ29.5㍎、重要文化財、長岡市馬高縄文館保管)

巻頭言

昔、信濃川をはさんで、この岸と向こう岸の間で人のかぼそい対話があった。

かつて、向こう岸はまるで異国だった。

大河の激しい波は、交流を阻んでいた。

むしろ、川に沿って、産業が生まれ

洪水によって強い克己心が人材をつくりあげていった。

いまから、およそ十年前。

平成の大合併のなかで

中之島、越路、三島、山古志、小国、和島

寺泊、栃尾、与板、川口

そして長岡という信濃川を中心とした

信濃川文化圏ともいってもよいまちが形成された。

もとより、大河を包含したまちは全国にいくつもある。

しかし、長岡は他市町村の異質の風土を

互いに認め合いながら

新しいまちの歴史をつくりあげようとしたのだ。

古きよきことを融合し、素晴らしい明日を

創りあげようとする。

そのとき、強いエネルギーを発するものだ。

平成三十年(二〇一八)は

その中核となった長岡のまちができてから四百年。

大河信濃川の流れをみれば、先人たちの

温故知新の心が伝わってくる。

故郷を思えば復興の気持ちも沸いてくる。

市民協働の自然財産の信濃川の歴史・文化を探り

新しい風土記としての信濃川記行を

みんなで創ろうではありませんか。

長岡開府四百年記念事業実行委員会 会長 磯田達伸

いきがポーンとさけたてや

越後の民話 水神童子の世界

あつたてんがな。
つあつあは、その松
橋の上から、ダボシダボシと
川へなげて、ンな
川の神さまにおさめたと。

七つばかの女の子がきて
「おれを、うちへ
ふるうていってくれ。」

「この子は福の神さまで
何でも、ほしいものを
だしてくれるぞ。」
それから、ばかげに、
「金持になつたんだんが
しんしょうがようになつたんだんが

（そうしたら）
ほうしたれば
そのうちは、また
もとのように
びんぼうなうちに
なつてもたど。
いちがポーンとさけた
なべのしたガラガラ。



うちの子供が
川からきた子供をいじめて
「お前のようなもんは
（家を出ていけ）
たつたいま、うちへいげ」

「おらを
ふるうていけば
米がほしいけや米
味噌がほしいけや味噌
銭がほしいけや銭
なんでも望みのもんを
だしてやる。」



越後の民話を発掘した水澤謙一。
明治四十三年（一九一〇）生まれの水澤
謙一は教職のかたわら、休日の民話採集に
あけくれた。

採集の志は失われゆく越後の人物風土を愛
惜し、伝承を残そうとしたところにあつたのだ。

水澤の心は始め、人間界の峠（異境）に
興味を持ったが、次第に民俗研究、そして
民話へ移つていった。

いま、その言葉を水澤によって多く伝えら
れている。話者の心の奥底に眠っていた哀歌
などがよみがえつてきたのである。

川もメルヘンで語れば、子どもたちに深い情
操を与えるものとなる。大人だって、母なる
川を想起させる川の伝承を聞けば、感動す
る。失われようとするメルヘンの再現をめざし
た志は、まさに、地方再生の文化である。

信濃川をめぐる民話のなから、水神童
子を紹介しよう。

なお、民話には、「いきがポーンとさけた」
と語り納めの言葉がある。

ほかにも語り始めの、「昔、あつたてんがな」や
「いきがポーンとふつやけた」などの語り納
めがあるが、「いきがポーンとさけた」ほど、
民話の凄さを伝えてくれるものはない。

その信濃川の不思議さを現代、生きてい
る私たちが探るのだ。

水神童子は、語りのあと、不思議な余韻を残す民
話である。

信濃川の豊かな流れが、漁撈や農耕にもたらす
の恵み。

信濃川の舟運が、とおく都からこの地にもたらす
財や富貴。

古来、川の神は、子どもの姿で現れる。

川の神に愛でられた貧しい一家は、水神童子の摩訶
不思議な力によって、あれよという間に富み栄える。

けれど、水神童子の愛らしい童顔が、川の神のもつ
ふたつのお顔の、片いつぽうであることを忘れてはい
けないということを教えてくれる。

水澤謙一によって、失われてゆく伝承文学の一部が
生き残ることができた。それは、日本文化の再構築に
迫られたときに、必ず役立つことだろう。



水澤謙一
（みずさわ けんいち 1910～1994）
明治43年5月、長岡市生まれ。新潟師
範学校（現在の新潟大学教育学部）を
卒業後、公立小学校の校長をつとめた。
勤務のかたわら民話採集に励み、第1
回柳田国男賞を受賞。

注 水澤謙一編『いきがポーンとさけた』未來社 昭和二十二年より 原文のまま（一部抜粋）

信濃川文学記行

信濃川

信濃川よ

静かなるながれを見れば
かぎりなく想ひわくかな

水くぐり

白洲にまろび

草笛を吹きて遊びしところ

夏の日の

青萱の狭庭につつみて

精霊のながしどころ

石まろき沈床のうへに

ながながと落日のひかりさすとき

石のごと われも黙しき

ああ われはつねにながれとあり

ながれはつねにわれとありけり

みはるかす山山よ

弥彦よ 苗場よ 黒姫よ

はるかなる ひかりこそさすらへ

この岸に

いくたびか友とかたり

いくたびか若き夢見つ

ああ 若草の道や落葉の道

遠つ日の光ほのかなれども

いまもなほ水はながれつつあり

星野慎一詩集『郷愁』

信濃川の流れを 眺めつつ

長岡市出身のドイツ文学者、星野慎一は、リルケ研究者であると同時にすぐれた詩人であった。そして、故郷長岡に深い愛惜の情を持っていた。

その原点は、町の脇を流れる信濃川だ。

昭和二十五年（一九五〇）三月に編んだ詩集『郷愁』にその鋭い感性の源を知ることができる。

「詩は無限に通ふいのちである。はろばろとしてはてしなき草原のなかの、なつかしきひとすぢの徑である。わたくしも、いつしか、この徑をほそぼそと辿ることをおぼえた。もとより仰ぐべき星もなく、いちにんの道づれとてもなかつた。わたくしは、つねに、日の暮れんとする野の徑をいそぐさびしい旅人であった。」

わたくしの故郷は北国である。ニーチエの詩『孤愁』を想はせるやうな自然が、わたくしの若いたましひをはぐくんだ。（中略）『自然はどこしへにも

ふるさとの太古を偲んで

縄文時代の人びとも うららかな春の日には
ひっそりと頭をだした露の曇を 摘みとって
ほのかな土のにおいを なつかしみながら
遠い山々の雪のひかりを 仰ぎ見たであろう

信濃川は 悠々と 流れていた

雪解けの水量はゆたかで

しんしんと 深く 青く

春の陽射しを けじきかえす

河原の砂利の きらめきも
心にしみ入るようにかがやっていた

秋の日の 河岸段丘の 広葉樹林の茂みのなかに
いのらの稗の クリヤドングリ クルミヤトチの実を
拾い集める おどめらの姿があつた
林の蔭に おのずから踏みしめた 萱の原へのほそみらは
彼女の 人目を忍ぶ 恋の通い路であつた

「ミス馬鹿」の 美しき ふるさとの太古のおどめの
やわ肌の あたたかさよ

「火端土器」と 飽かず眺めていると 縄文の人びとの
鼓動と 息づかいが きこえてくる

それは 日本人の 英知と美意識の 原産であつた

米づくりを覚えた弥生人は 河岸段丘をはなれて
湿地のひろがる 沖積地へ おりていった
取入れの終つたあと 彼らには
疲れた腰をさすりながら 澄んだ夜空の星を仰ぎ
草むらの茂みにすだく 虫の声を聴いたであろう
そして忍び寄る冬の気配を
ひしひしと 感じとっていたのであろう

太古の人びとも ひたすら死を恐れたが
無常観とは まだ 縁がなかつた
不滅な世界を切慕し
神々とともに生きる 常世の世界観を
もっていたという

星野慎一 『長岡市史資料編1・考古』（平成四年）より



水道公園にある信濃川の詩碑(平成9年(1997)10月建立)
はじめ、水道局橋内にあったが、のちに信濃川河畔の水道公園へ移った。



信濃川をみつめる星野慎一 平成7年(1995)夏撮影

星野慎一

(ほしの しんいち 1909～1998)

長岡市生まれ。ドイツ文学者 長岡中学校、新潟高等学校、東京帝国大学文学部ドイツ文学科卒業。東京教育大学文学部長のとき家永三郎裁判に遭う。リルケ研究の第一人者。日本エッセイストクラブ賞『若きリルケ』など著書多数。長岡市史編集委員会委員長を務めた。

そして詩人は『長岡市史別編・民俗』で、「人びとの暮らしのあとをふりかえって」と題し、大河信濃川周辺の長岡を紹介している。

東山連峰と西山丘陵地帯との間にひろがる 広大な平原
その中央を 大地をひたしながらか 静かに 信濃川が流れてゆく
みはるかす わがふるさとの 市域である

北越風土記

水と雪は、越後に住む人びとを苦しめていた。人の歴史に風土というものがあると知ったのは、その苦渋に耐えて、自然の恩恵として、人の心に受け入れた江戸中期の頃であつたらしい。

水の国の都市伝説

長岡市寺泊地域の万福寺に生まれたといわれる橋崑崙なる人物が、文化九年（一八一二）江戸柳亭種彦校訂・葛飾北斎画による『北越奇談』六巻を江戸永寿堂から出版した。

崑崙は謎の人ではあるが『北越奇談』を記した頃は三条市に暮らしていたことは明らかで、内容から場所は信濃川のほとりであつたと思われる。

その著『北越奇談』巻之一「龍蛇ノ奇」に「北越は水国なり。西北海広く、東南坤に環りて山勢波濤のごとく聳て、其央只香山（弥彦の別名）米岳を置のみにして余地尽く、平田邑里離坎八十余里に連り。横幅尤地の厚薄に従がへ、或は八十、或は二十乃至三十余里に止て川脈縦横し、池沢星の如し」と説明している。

現代語訳すれば「北越（越後）は水の国であります。西北を望めば、海が果てしなく広がり、東南を振り返れば、山並が波濤のようにそびえています。その中間には、ただ香山（弥彦山）と



「北越雪中之図 葛飾北斎画」北越奇談
浮世絵「富嶽三十六景」で知られる葛飾北斎が、「北越奇談」の殆どの挿絵を描いている事で、この本の価値を高めたと思われる。橋崑崙自身が描いた4枚の挿絵の傍らには崑崙の本名である「茂世」と印が押してある。



「編者崑崙新潟にて龍巻にあう」北越奇談
寛政5年(1793)11月20日午後の4時頃、崑崙は新潟沖で小舟に乗船中に、竜巻に遭遇し、龍蛇は白刃を恐れるという伝承を思い出し慌てて刀を抜き額にあてて舳先に座った。龍の真の姿をこの機会にこそと思って、雲の間を注意深く見たが、その形は見えなかった。と記している。

宇内無比の一大奇観

『北越奇談』に、雪国の暮らしに関する記述が少ないのに比べ、雪の中での暮らしぶりを丹念に記したのが塩沢（南魚沼市塩沢）の鈴木牧之編纂、京山人百樹（山東京伝の弟）増修、京水百鶴（岩瀬京水）画の『北越雪譜』である。天保八年（一八三七）初編三巻が江戸で発行されベストセラーとなった。読者の要望に応じて天保十二年（一八四一）には二編四巻の続編が発売されている。

文政二年（一八一九）二月八日に牧之は、橋崑崙を訪ねている。「八日は三条橋崑崙先生を尋ねて終夜の談話・・・と自書『北海雪見行脚集』に記している。陽炎の火鉢にも立つ庵かな

『北越奇談』と『北越雪譜』は、共に北越の風土を知る上で不可欠な二編だが、似た感性の二人が夜を明かすところは興味深い。崑崙の兄彦山が子どもの頃、親戚筋である地藏堂の漢学者大森子陽の塾で、良寛と机を並べていたと尚更である。

良寛、牧之、崑崙は同じ時代を生きていたのだ。

『北越雪譜』は『北越奇談』より二十五年後に世に出ているが、牧之が構想を立てたのは同時期であつた。出版の協力を託した江戸の文人山東京伝や曲亭（滝沢）馬琴等との交渉が難航し、紆余曲折を経ての出版であつた。二編が発売した後、続きも書き始めていたとされるが、天保十三年（一八四二）に牧之は亡くなっている。



「波海川奇蝶之図」北越雪譜
春の彼岸の頃、信濃川に注ぐ波海川で、数百万の白い蝶(石蚕)が水面ぎりぎりに、川面が見えないほどに埋め尽くし川下から川上へと飛んでいくという奇妙な現象を描いている。まるでお花見の花吹雪を観るように見物客があふれ、ゴザを敷き、家族で重箱をつつき酒を楽しむ姿は異様な光景である。



越後古志郡二十村闘牛之図
曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』には越後古志郡二十村(長岡市山古志地域ほか)の闘牛が登場する。牧之は、文政3年(1820)に馬琴の依頼で闘牛の様子を取材しており、詳細な取材記録を受け取った馬琴は、「宇内(天下)無比の一大奇観なり」と記している。

牧之は、『北越雪譜』の中で信濃川の鮭の料理や漁について幾つか触れている。長岡から川口にかけて捕れる鮭の味は格別であり、一番に捕れた鮭を長岡藩主牧野家に献上すると一匹につき米七俵が与えられたという。また、雌の鮭が川を上り産卵する習性を紹介した後、自論として、「寒い時捕れた雌のハラコと雄のシラコを混ぜて、鮭の

住む川の石や砂で包み、瓶のようなものに入れる。そして鮭の住んでいない地方の山川の清流に鮭が産み付けたようにしておき、この川に鮭が出ても、三年間は捕ることを禁止するならば、鮭が産まれるかもしれない。産まれれば国益に成るだろう」と鮭の捕れない西国での養殖のような提案も添えているのは驚きである。

長岡市民になったお殿様

No.4

牧野家第十七代当主牧野忠昌氏寄稿

牧野家の歴史

牧野が東三河を治めていた時代から現在まで続くゆかりの寺社は多く残っており、その一つが豊川市にある牧野成定公（牛久保城二代城主）の菩提寺法月山光輝院である。

豊川市牧野町牧野城址近くの光雲山明全寺の墓地には自然石の墓石（高さ八十四センチ幅四十七センチ）があり、正面には清浄永居士と刻まれている。過去帳を調べると牧野城主であった牧野田内伝蔵左衛門尉能成である。これは豊川市に現存する牧野家の一番古いお墓ではないかと思う。

豊川市御津町に大恩寺がある。ここは牛久保牧野家の菩提寺としても栄え、寄進したものが寺宝として公開されている。その一つに牧野出羽守保成（牛久保城初代城主）が天文二十二年（一五五三）に寄進した念仏堂があり、昭和三十一年に重要文化財に指定されたが、平成六年夏花火が萱葺屋根に移り焼失してしまった。今となっては、誠に残念なことである。

現代に生きる牧野ファミリー

太古の時代より信濃川には毎年サケが遡上してくる。支流を含め多くの河川で

今でも自然産卵が営まれ、稚魚となり雪解け水と共に日本海に流れ出、三〜四年かけて北太平洋を回遊し大きく成長し生まれた元の川に帰ってくる。

周辺に数日前の雪が残る十二月、NPO法人「新潟水辺の会」が主催するサケの発眼卵河床埋設放流現場に立ち会った。場所は信濃川支流黒川の上流河久保川である。この放流方法は河川の底に人工的に産卵床を作って発眼卵を埋めるものである。

江戸時代長岡藩では秋に信濃川に遡上してくる一番鮭を江戸の將軍に献上する習わしがあった。捕獲者には長岡藩から褒美が与えられた。私は長岡に居住したことにより、今回のサケ発眼卵放流に立ち会うことが出来て大変うれしく思っている。無事に稚魚が成長して元の川に戻ってくる数年先が楽しみである。



河久保川にて



埋設の様子

平成三十年（二〇一八）が四百年にあたります

開府四百年のまち長岡

未来へつづくまちづくり

長岡開府四百年まであと一年となりました。長岡藩は江戸時代のはじめから二百五十年にわたり牧野氏が治めておりましたが、長岡藩風の常在戦場の精神やそこから生まれた米百俵の精神、市民協働の精神は、現在まで市民に受け継がれています。幾多の戦禍や災害に見舞われながら不死鳥のごとく蘇り、発展してきたこのまちや人々の大切な精神性です。

一方で、この四百年で長岡のまちは大きく変化を遂げました。かつて長岡城のあった場所は、JRR長岡駅やアオーレ長岡などがある中心市街地として発展しました。また、大河信濃川が市の中央を流れ、東に守門岳、西に日本海があ

る、川・山・海と自然環境に恵まれた広大な市域となり、様々な歴史、伝統文化がある多様な魅力にあふれるまちとなりました。

先人たちが汗を流し、涙を流し頑張ってきたまちづくりをしてきたからこそ今があります。それぞれの地域で積み重ねられた歴史を見つめ直し、ふるさとへの愛着や誇りを高めていくことも大切にしなが、長岡市全体で長岡開府四百年をお祝いしたいと考えております。

まちが四百年も続くことは素晴らしいことです。様々な魅力にあふれる私たちのまちを次の百年へ引き継いでいくこと、子どもたちが明るい夢を持つことができるまちづくりをみなさんと取り組んでまいります。



磯田 達伸 長岡市長

与板歴史民俗資料館

兼統お船ミュージアム

与板の宝を一堂に展示

与板歴史民俗資料館には、古くは徳昌寺遺跡等の縄文土器から戦国時代の直江家や与板衆、牧野家の分知により誕生した与板藩牧野家の資料、その後入封した井伊家の資料を含めて、考古・歴史・民俗・美術など多岐にわたる与板の宝が収蔵されている。

特に近年は「愛」と「義」に生き残った武将・直江兼統の大河ドラマ放映に伴い、平成二十一年より資料館の愛称を「兼統お船ミュージアム」としてリニューアルオープンし、直江兼統の展示コーナーを充実。そのほかにもドイツで修業した日本初のビール醸造人・中川清兵衛の生い立ちから業績の紹介など、人物に重点を置いた展示がされている。



直江兼統の銅像が来館者を迎える



直江兼統の鎧(レプリカ)を360度見る事が可能

長岡市民になったお殿様、与板歴史民俗資料館 12

平成二十九年度は井伊家

平成二十九年度は大河ドラマ「おんな城主直虎」の主人公・井伊直虎が育て、後に徳川四天王となった井伊直政の長男・直勝（直継）を藩祖とする与板藩井伊家の展示を行う予定である。

本能寺の変で窮地に立った徳川家康を井伊直政が、伊賀越えて岡崎城に無事帰還させた功により拝領した「孔雀尾具足陣羽織」の特別公開も予定されているので、ご期待いただきたい。



井伊直政公拝領孔雀尾具足陣羽織(市指定文化財)

与板と信濃川

信濃川と黒川が合流する地点に位置する与板は、河川交通の要衝であり江戸時代には三国街道を横切る信濃川の渡し場となったことで川湊を整備された。商人の中には自ら川湊を整備して船を持ち、年貢米を運送した帰りの積み荷として日用雑貨を輸送する者も複数現れ、後には信濃川の舟運から日本海への海運を通じて大坂や江戸・函館など各地と盛んに

交易を行う「豪商」へと成長し、与板藩の財政を支え町を発展させた。豪商の存在は町の発展を支えるとともに薫り高い文化と多くの人材を生んだ。父親が与板の商人出身で豪商と頻繁に交友した良寛や、



豪商大坂屋看板 最盛期には全国の長者番付の3番目に位置した。(市指定文化財)

豪商扇屋中川家の出身でその情報網から海外へ憧れを抱き渡航したビール醸造人・中川清兵衛、豪商大坂屋三輪家に生まれ日本画壇の巨匠としての地位を築いた画家三輪晃勢などである。

このように信濃川の流れと地形を巧みに活用した人々の知恵と努力によって、与板は栄えたのである。



与板歴史民俗資料館
開館時間/AM9:00~PM5:00
休館日/毎週月曜日、12/28~1/4
所在地/長岡市与板町与板乙4356
電話/0258-72-2021
入館料/大人300円 小・中学生150円
(団体割引あり)

開府四百年のあゆみ

No.4

いまから八十年前、信濃川に架かる長生橋の鉄橋化を祝う式典が開催された

新長生橋にかける夢

長生橋は、昭和十二年（一九三七）に長さ八五〇呎、幅員七呎の鉄鋼橋になった。植木組が行った工事に要した鉄材約二千八百八十七ト、セメント約四万九千二百ト、人夫約六万一千人。五年がかりの大工事の完成を各新聞社は高らかに伝えた。

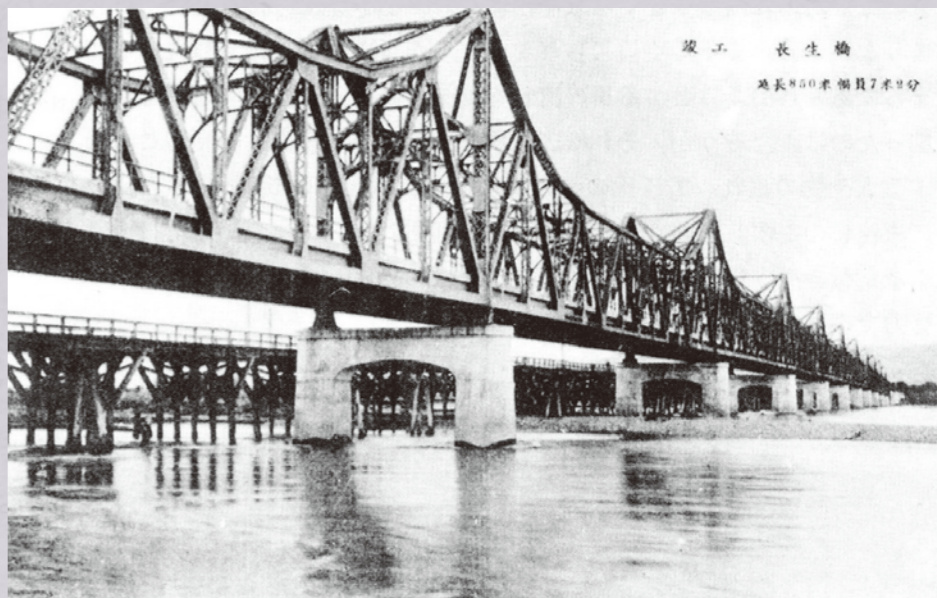
また、十月十二日の竣工式当日の「新潟新聞」は、「長生橋こそは三島郡各町村文化開発にとつては極めて重要な役割を持つ」とする関原町長（現長岡市関原地区）の祝辞を添えている。

新しい長生橋には、洪水に強い防災上の役割とともに、信濃川に隔てられた当時の長岡市・古志郡と三島郡の産業・経済・文化の一体感の醸成も期待されていたのである。

木橋から鉄橋へ。長生橋は、近代から現代へと伸びゆく長岡市を、今も変わらず見つけている。



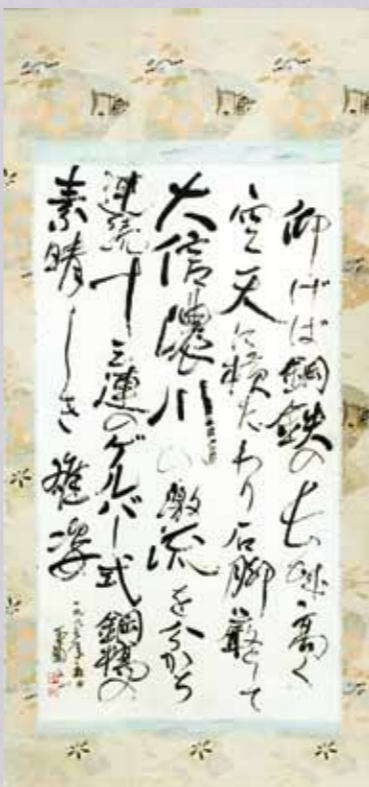
昭和12年(1937)10月12日付「北越新報」 「待望久し長生橋 今日ぞ晴れの渡橋式」の見出しで、長岡市草生津町在住の三世代の三夫婦が渡り初めを行ったことが記されている。



手前に鉄橋となった長生橋と奥に木橋が見える(絵はがき・昭和12年)



信濃川右岸からみた現在の長生橋



長生橋鉄橋化60周年を記念して田中玉蘭氏が揮毫

仰げば鋼鉄の長城高く
空天に横たわり石脚殿として
大信濃川の激流を分かつ
連続十三連のゲルバー式鋼橋の
素晴らしき雄姿
一九九七年夏日 玉蘭書

千也がゆく

かずや

KAZUYA REPORTS

長岡藩

ゆかりの地を

巡る探訪記

第4回

川口・小国編

山口権三郎を一言で例えるなら「上善水の如し」と言う言葉が合うのではないだろうか。

痕跡を求め長岡市川口地域にある塩殿水力発電所跡に向かいました。発電所に進むにつれ道には雪がちらほら、夏は草木が生い茂り信濃川は水を増し、冬は雪で覆われるそこに貯水池跡があった。レンガ造りのいくつかの水門と山から流れ出る水のトンネルはいかにも明治時代の面影を残している。

これこそが山口権三郎が生涯最後に手がけた事業の塩殿発電所だ。完成を待たずに明治三十五年十月十二日に権三郎はこの世を去るが、長男達太郎が事業を継承し発電所を完成した。

今も流れる貯水池の水を見ていたら権三郎の生き方が映って見えた。水は己の形に囚われることなく形を自由自



塩殿発電所跡地
明治38年～昭和26年の47年間この地形と信濃川を利用する事で日本2位の発電量(発電能力1,240瓩)だった。長岡480戸・小千谷220戸の町々に明かりを灯す事ができた発電所の貯水池跡。



山口庭園・資料館(公財)山口育英奨学会
開館時間/AM9:00~PM4:00
(冬期間は閉館)
休館日/毎週月曜日
(月曜が休日の場合はその翌日)
所在地/長岡市小国町横沢802番地
電話/0258-95-2002
入館料/無料

山口権三郎
天保9年(1838)6月9日 長岡市小国町横沢に生まれる。
明治13年 経済界の同志で「誠之社」を設立
明治21年 新たなエネルギー産業「日本石油会社」を設立
明治25年 実業学校「修習館」を設立
明治29年 経済活況で「長岡銀行」を設立
明治29年 東京と新潟を繋ぐ「北越鉄道株式会社」を設立
明治35年 新潟初の水力発電所「塩殿発電所」を着工



山口資料館「敬山閣」1階
長岡市小国地域にある山口育英奨学会の資料館「敬山閣」
今まで手がけた事業の資料が盛りだくさんある。



は権三郎の村人への優しさだった。鉄道を作る事は小国の民が大切にしていく田畑を奪ってしまう事であえて鉄道を通さなかったと言います。それほど小国を愛していたんですね。

執筆：石丸 千也 (いしまる かずや)
長岡で美容室を経営し、自らスタイリストとしても活動中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後RYO-MA倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。

日本の政界の顔『田中角栄』
その以前に長岡にはドンが居た
その名は『山口権三郎』
石油銀行鉄道・発電・人材育成……
この人物の政治的手腕の
右に出る者はいない！

全国には様々な水力発電所があり人々の生活に豊かさを送り続けている。今、塩殿発電所の建物は無いが、レンガで化粧された堤をもつ貯水池がひっそりと残る。当時の面影を偲ぶ姿は活気があり堂々とし存在感がありこの町のシンボルでまた誇りだったのではないだろうか。

金峯神社<和銅2年(709)4月創建>

金峯神社は山岳信仰と仏教が結びついた神仏習合の神社であった。産土又倉神社(うぶすなまたくらじんじや)が鎮座したところに蔵王権現が来て合祀され、地名も又倉村から蔵王村へ変わった。明治維新に神仏分離令により金峯神社と改称され本殿に合祀。また長岡復興祭が創祭される際、長岡市内の産土神のご祭神も合祀された。

所在地:長岡市西蔵王2-6-19



蔵王・ 金峯神社の祭事

王神祭とは

信濃川沿い、西蔵王の金峯神社に鎮座する又倉大神を、里人は王神様と呼ぶ。

未開のこの地に降臨し、農業・漁業・酒造などの技を伝え、長岡の里を興したとされる。開拓の神であり、縁結びの神である。

金峯神社では、毎年十一月五日、王神様に五穀豊穡への感謝や子孫繁栄を祈る王神祭が行われている。

祭儀の中でも注目は、子孫繁栄の示鏡行事と、信濃川産の雌鮭を古来伝授の包丁式にて奉納する年魚行事。

示鏡の儀式[※]は、神の「婚交の神秘」として、嘗て一般公開されなかつた秘儀である。

年魚行事の見所は、包丁で鮭を切り分ける「子相伝」「思念切り」の技。烏帽子と垂直を身にまとい、大まな板上の鮭に直接手を触れず、右手に包丁、左手に一本の鉄箸を持って切り分ける。切り身は鳥居の形に整えて、神に献上される。

時勢により簡略化されたが、古代の生活文化、慣習が祭儀に遺されている。その特殊性から新潟県無形文化財に指定されている。この後は神人共食の直会だ。ご祭神のお下がりを戴くとしよう。

※「示鏡の儀式」 鏡と鏡で雌雄の面を合わせること、契りの意味する。

王神祭の雑煮

王神様の神霊を戴く

「こりゃあ、うまいー」

年に一度、王神祭のお下がりで戴く、熱々の雑煮の旨さは格別だ。思わず声が出る。

お碗の中の食材は王神様に奉じた鮭・いくら・餅・とう菜。味付けはお神酒と醤油のみ。具の種類と量のバランス。引き出された風味の絶妙なハーモニー。見事である。

とう菜の栽培は近隣の農家に依頼。毎年、王神祭の日に合わせて収穫・献上される。新潟では、冬から早春に立つ茎の部分を食べる青菜を総称して、葶菜と呼ぶ。茎のシャキシャキとした触感と独特のほろ苦さと甘さが特徴だ。

丸餅は四角の食べやすいサイズに切り分け、先に焼いた後、湯にくぐらせて、盛り付ける。よって、口にするときの焦げの香ばしさが堪らない。食材の吟味の



他に、こうしたひと手間が、雑煮の味を際立たせるのだろう。

王神様の伝説が甦ったこの日、この地の風土の原点を五感で味わえた。

直会のお神酒と雑煮には神と人、人同士の絆を深める神霊の力が宿っているのだろう。これこそが、王神祭の魅力に違いない。

ROOTS
400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう
平成30年は長岡開府400年

越後長岡ROOTS400 第4号 信濃川記行 ~ながはればつねにわれとあり~

次号予告/司馬遼太郎の「峠」

発行/長岡開府400年記念事業実行委員会 平成29年2月15日
編集/越後長岡ROOTS400編集会議 代表 稲川明雄
石丸千也、恩田富太、星貴、渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10(開府400年記念事業準備室内)
Tel.0258-39-2395 Fax.0258-39-2272
E-mail: kaifu400@city.nagaoka.lg.jp
制作/株式会社ネオス
協力/長永寺、水澤一郎、星野百合江、浄秀寺、柏崎市立図書館、(株)新潟日報社
(公財)山口育英奨学会、長岡戦災資料館、長岡市立科学博物館
長岡市立中央図書館、長岡市立中央図書館文書資料室